若者の色使いが、昔とずい分変わってきた。それは、色に対する感覚が変化していることを示す。

最近は、原色使いが服などにもかなり現われている。この原色を好む傾向は、テレビからの影響による所が大きい。テレビに映し出される色は、非常に鮮明であり、ビビッドである。つまり、実に、人工的な色合なのだ。

かつて、人々が、着物や絵に用いた色も、かなりあざやかなものであるが、その色とても、自然の中に存在した色であった。柿の実の色。紅花の赤。木々の緑。海の青。

しかし、現代の若者達の用いる色は、それだけではなく、人々が作り出した色である。例えば、螢光ピンク、螢光オレンジなどの螢光色は、今までの生活の中には、あまり見る機会の少ない色だった。

コンピューターグラフィックやレーザー光線の一般化により、それらの色は、生活の中に、はいり込むこととなる。

最初、螢光色に、大人達は、眉をしかめた。そのあまりに他の色とは異なる色味に…。その色は、他の色との調和を乱す、それ独自の色なのである。螢光色は、その名の通り、夜、闇、黒とのみ、上手に調和する。黒をバックにした時、はじめてその色は、まさに光るのである。

しかし、若者達は、その色を黒という一つのパートナーに規定せずに、様々な色との組み合わせを作り出した。それは今までにはない不思議な効果を生み出した。

若者のセンスは、柔軟である。新しい物に出合うと、彼らなりの感覚で、それを取り込む。そのエネルギーは、本当に強力である。今、大人は、とてもそれにたちうちできない。

幼児の教育　第八十五巻　第七号
七月号　©
定価四〇〇円
昭和六十一年六月二十五日　印刷
昭和六十一年七月一日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。